解説

呉智英 Kure Tomohusa

本誌「ガロ」は一九六四年九月に創刊された。この「九月」は表記号数であり、出版界の通例として一か月先の月名を表示してあるから、実際には夏真盛りの七月末に刊行されたわけである。草創期「ガロ」を貫く太い柱であった白土三平『カムイ伝』は、創刊号には間に合わず、十二月号から連載開始された。戦後復興が完了したことを世界中に印象づけるべく開催された東京オリンピックが成功裏に閉会したちょうどその頃のことである。それ以後『カムイ伝』は、ごくまれな休載は別として、一九七一年七月の第一部完結まで続いた。この七年間を「ガロ」の第一期=草創期と呼んでよいと思う。

「ガロ」は再来年創刊三十年を迎える。これを機に「ガロ」の歴史をふり返る企画が今年初めから続いている。今月と来月は文章の特集である。今月は草創期「ガロ」に掲載された評論やエッセー、来月はその時期に週刊誌や新聞紙上で「ガロ」を論じた評論や記事、という割りふりだ。文章特集の企画の意図は、当時どういう政治・文化状況の中で「ガロ」が読まれたのか、それがまた紙面や作品にどうはね返っていたのかを、若い読者たちに知ってもらいたいからである。懐旧趣味を意図したものではないことは断るまでもない。また、これらの文章そのものも当時の政治・文化状況と結びついている。私がこうして解説の文章を書くのは、時代の差を埋め、読者の理解を助けるためである。

まず、この一九六四年から一九七一年という時代をかいつまんで説明しておこう。

先にも述べたように、一九六四年は東京オリンピックが開催された年であり、これに合わせて東海道新幹線が開通した。翌六五年から七〇年までの五年間、いざなぎ景気が長期持続し、高度成長経済は完成局面に入った。この繁栄は公害や都市問題を生む。半面、文化や教育に費す経済的余裕ができ、それが学生を中心とした青年たちの叛乱をもたらすことにもなった。彼らは発達したジャーナリズムや教育を享受することによって戦後民主主義的な正義感を育み、公害や都市問題に批判の目を向け、また折から熾烈になってきたベトナム戦争をきっかけに反戦運動も盛んになった。ほぼ時を同じくして、支那では六六年から文化大革命が始まり、これも学生運動の一部に影響を与えた。

これら青年たちの叛乱に掲げられたスローガンは、今となっては、個々の未熟さや誤りを指摘するのは容易である。しかし、ここはそれを指摘したり克服を論じる場ではない。ただ、戦後史の流れの中で戦後思潮の極相(クライマックス)として現れたことだけを強調しておきたい。

政治・経済の以上の状況は、マンガ状況にも反映している。マンガ出版界は、五九年創刊の「少年サンデー」「少年マガジン」がしだいに軌道に乗り始め、大学生がマンガを読む風潮がマスコミに取り上げられるようになってきた。六六年には新書サイズの単行本が各社競合で出されるようになり、マンガが〝消耗品〟から〝蔵書〟に変わり始めた。「ガロ」は小出版社発行の月刊誌であるが、貸本を長く手がけた長井勝一の個性に彩られ、貸本系の有力作家が商業主義を顧慮せずに執筆できる場となっていた。特にこの草創期は『カムイ伝』の反響が大きく、学生や知識人に支持されて発行部数も六七年頃には相当大きく伸びるようになった。水木しげる、つげ義春らが、白土三平とはちがう作風で「ガロ」の奥行きを深めたことも挙げられる。

今回収録した評論やエッセーは、以上のような時代背景の中で「ガロ」に掲載された文章をレイアウトも原型のまま復活したものである。

初めの藤川治水「白土漫画のおもしろさ」は、『カムイ伝』連載開始に合わせて書かれた白土三平紹介の小文だ。藤川は児童文化・大衆文化の研究者で、早くから白土三平を評価した一人である。白土マンガ=唯物史観という定式も、私の記憶では藤川によるものであった。単純にすぎるきらいがあるが、当時としてはむしろそれが白土マンガの評価を高め、読者の目を引き寄せる働きがあった。マンガは娯楽のための消耗品としか思われず、残酷描写が指弾された時代である。マンガ側に立つスポークスマンが必要とされていたのだ。

高山英男『ネガの魅力』も同じ意図のものである。現代子どもセンターは児童文化研究者の阿部進が設立したもので、「現代っ子」と言われる子供たちの心理や文化を研究した。この文章の中にも「現代っ子」が出てくる。ほとんど「新人類」と同じように使われているのが面白い。その「現代っ子」も今や四十代半ば、「新人類」も三十代となった。

野村重男『水木しげるのまんが』と石子順造の『庶民という匿名の存在』は、「ガロ」の第二の柱となった水木しげるを論じたものだ。前述のように、草創期「ガロ」は白土三平『カムイ伝』あっての「ガロ」だったのだが、読者はその「ガロ」に登場する水木マンガの飄

逸な味わいにも魅了されていった。白土は当時既に「少年」（光文社）に『サスケ』を連載し、新進ながら有力作家となっていた。しかし、水木は野村論文の時点ではまだ貸本作家でしかなく、一般読者の知名度はないに等しかった。石子論文の頃には講談社賞も受賞し、読者も一気にふえ、正当に評価されるようになっていた。

野村重男の経歴その他は不明。石子順造は一九六〇年頃からマンガ評論も手がけた美術評論家である。作品説明に終わらぬ評論は、時に深読みに陥ることもあったが、マンガ評論の質を高めたことは特筆できよう。一九七七年病没。似た名前の石子順とは別人である。

渡辺一衛『《絵》としてのマンガ』は、佐々木マキ、林静一を論じたものだ。この文章が掲載された頃は、東大・日大を頂点とする全共闘運動が激しく燃え上がっていた。それと対応するように、マンガ界でも、従来のマンガとは異質の方法論を持つ新人が登場し始めた。「ガロ」はそれら新人にも発表の場を与え、マンガ関係者以外からも広く注目された。佐々木、林の二人は、まだ二十代前半だった。筆者の渡辺一衛は物理学者で評論家。ベ平連運動にも関わった。

「目安箱」は時評コラムで、一九六五年三月から一九八四年六月まで十九年も続いた。目安箱というのは江戸時代の享保改革時に設けられた民意聴取のための投書箱で、「カムイ伝」連載にひっかけたシリーズ名と思われる。初め一、二年は、黒川新、西光祓斬らが執筆していたが、ほどなく上野昂志が一人で連載するようになった。黒川、西光は、白土三平かその周辺の人物の変名らしいが、詳しくはわからない。上野は後に魯迅研究家・評論家となるが、連載開始時はまだ大学院生であった。

取り上げられているテーマについて解説を加えておこう。第一回と第二回は「脱脂粉乳」である。

戦後、米占領軍の指令のもと、さまざまな〝戦後改革〟が行なわれた。教育制度も改革され、その中で、戦前からあった学校給食も拡張・充実がはかられた。欠食児童の救済、栄養バランスの改善などが目的であったが、急激かつ画一的な改変につきものの反撥は今に至るまである。特に不評だったのが、一九七〇年前後まで続いた脱脂粉乳である。文中の「ララ物資」とはLARA（アジア救済連盟）というアメリカの半官半民の対アジア援助団体による援助物資の総称。アメリカで家畜の餌になるものを援助物資にしたというのは、半分ほどは真実であろう。日本人が第三世界援助に「不要品」を贈るというのと同じである。

第十二回で取り上げられた「日韓条約」とは、戦後二十年を経て日本と韓国との間で結ばれた四協定の総称である。戦後処理の一環であったが、この中に、朝鮮半島における唯一合法政府は韓国政府であるとの文言があり、これをめぐって反対運動が起きた。条約調印は六月、発効は十二月。この文章の掲載月は、表記月号は翌年二月だが、実際はちょうどその条約発効時に当たる。

第十三回で取り上げられた小繋部落入会権事件とは、ここに上野が書いているように、近代的所有権と前近代的所有権との移行期に生じた悲劇である。まず、字句の説明からしなければなるまい。「小繋」は「こつなぎ」と読む。岩手県の小部落である。「部落」というと、一九八〇年代に入ってから、無知無責任なマスコミが「集落」だの「地区」だのと言い換えたため、被差別部落のみを指すようになったが、もちろん、村より小単位の行政区画のことである。因みに言うと、マスコミが無知無責任な言い換えをした理由は、被差別部落とまちがえられて迷惑しているという一般部落からの苦情が多くなったからである。話を戻す。「入会権」は「にゅうかいけん」ではなく「いりあいけん」と読む。村や部落全体で、山や森を共同利用する権利のことだ。かつては広く日本中にあった所有権の形態だったが、近代的物権観念に遠いため、しだいに個人所有（多くは大地主）や国有となった。しかし、法的関係は前近代的関係から近代的関係に移ろうとも、現実の人間や生活はそうはいかない。新たな権利保証がないまま、以前あった生活も維持できなくなるのだ。部落民への同情論以上に、前近代の敗北と敗北の彼方にある可能性にまで注目した上野の文章には二十代半ばの青年のものとは思えない鋭さがある。

呉　智英（くれ・ともふさ）

一九四六年、愛知県生まれ。早稲田大学法学部卒業。マンガから、社会、思想まで幅広く評論活動を行なう。一九九一年、フランスで開かれた第十八回国際マンガ祭にゲスト出席。日本マンガの現状について講演する。東京理科大学でマンガ論も講義している。孔子論は某誌に連載中、三年後に完結、単行本化予定。

スポットライト

白土漫画のおもしろさ

(評論家) 藤川治水

白土三平の漫画は、どんなささやかな短編をとってみても、感動させるものを持っている。

というのも、そこにぼくらが文明によりかかってしまって、忘れさってしまっている。野性の力づよいエネルギーが描かれているからである。影丸はひとりでは弱い農民たちに、団結の力というものを知らせる。ほとんど武器にはならぬような農具が、そのためにすばらしい破壊力を持つようになる。シートンの書いた動物たちも、彼の手にかかれば原始的な活力を体いっぱいに宿している動物になる。

原子力を動力へと考えるような科学時代、人間の生き物の力といったものは、すべて過少評価され、そのマヒ状況から人々はすべてを機械にまかせようとする。自分の能力を試そうともしない。やがて手足を動かさない人間族は、想像上の火星人のように、頭でっかちで、手足がちょこんと付いているような生物になり下がるかもしれない。白土三平はそんな人間族の盲点について、大変な警告を発しているのかもしれない。影一族の独特な身体鍛練法、サスケの四つ身術の訓練などをわざわざ持ち出すのは、現代人への鋭い諷刺の矢であるわけになる。

また、同じように機械にだけ頼って頭さえも働かせようとしない現代人に、原始人的な生活の知恵を持てとも暗示する。「シートンの動物記」二巻の第三話では、スプリングヒールド狐スカイへースや女房狐が、猟犬をまくのに汽車を利用する。線路の鉄のにおいでその体臭を消したり、汽車の進行方向に逃げ、瞬間にして汽車から身をかわしては犬をたじろがす。文明の恩恵によくしてはる動物の方が、その文明の利器に恐怖をもち、野性の動物の方が遙にそれを利用する。何と皮肉なことではないか。保護者もいない自分の命は自分で守り通す以外は方法がない。そこから生まれた知恵である。

このように白土三平は、ぼくらが科学文明に甘えすぎ、大変重要な人間の力や知恵さえも捨てかねないような情況の中で、それを知らせ、大事にいたらぬよう教えてくれているのである。だからこそ、彼の作品に感動させられるのである。その白土三平の大人も考えさせられる漫画が、毎月「ガロ」という月刊誌になってでる。毎月、毎月が楽しくなると同時に、きっとぼくらは勇気づけられることと思う。安直なアンプルの薬よりも、きっときっと効果があるだろう。

(一九六四・九・一)

---

7 10 ローリングストーンズ「サティスファクション」全米で1位。
15 米マリナー4号の火星の近接写真を発表。
25 ボブ・ディラン、ニューポートフォークフェスティバルにエレキギターで登場、嘲笑と野次を受ける。
8 9 シンガポール、マレーシアより独立。
19 佐藤首相、日本首相として戦後初の沖縄訪問。
24 サウジアラビアとアラブ連合がイエメン停戦協定に調印。
10 3 キューバの革命運動家チェ・ゲバラ、南米へ出国。
15 米バークリーで1万人によるベトナム反戦デモ。全米に拡大。
20 米、ベトナム駐留米軍13万1700人と発表。
21 南海の野村克也捕手、2リーグ後初の三冠王達成。
11 1 国連総会で人種差別撤廃決議。
8 英、殺人犯に対する死刑廃止法施行。
9 比大統領選で流血の選挙戦の末、マルコスが当選。
10 中国・姚文元の論文が文化大革命の発端に。
25 コンゴで無血クーデター。
27 ワシントンで数万人によるベトナム平和行進。
12 5 中国と北ベトナムが相互援助条約調印。
10 日本、国連安保理非常任理事国に。
朝永振一郎博士、ノーベル物理学賞授賞。
19 仏大統領選、ド・ゴールがミッテランを小差で破り再選。
21 北朝鮮、日韓条約粉砕を声明。
24 ベトナム戦争、クリスマス停戦。
この年 大相撲、初場所から部屋別総当たり制導入。日本の粗鋼生産量、米ソに次いで世界3位。高校進学率70%突破。

1966(昭和41年)

1 1 中央アフリカでクーデター。
3 アジア・アフリカ・ラテンアメリカ3大陸人民連帯会議。百ヵ国参加。
15 ソ連・モンゴル友好協力相互援助条約調印。
19 インド、インディラ・ガンジーが世界2人目の女性首相に選出さる。
24 全学ストの続く早大、期末試験中止、ストは6月26日まで続く。60年代後半の大学闘争の先駆となる。
2 3 ソ連ルナ3号、月面軟着陸成功。
7 米、南越首脳会談。グエン・カオ・キ首相、北爆強化要請。
22 マルコス比大統領、ベトナム派兵に合意。
24 ガーナでクーデター。
3 1 ソ連金星3号、初めて金星に到達。
12 インドネシア・スカルノ大統領、スハルト陸相に実権委譲。
24 英国国教会、カトリックと和解。
25 全米7都市とローマなど外国7都市で反ベトナム戦争集会やデモ。
27 南ベトナム・ユエで2万人の仏教徒による反軍事政権デモ。
4 1 サイゴン米軍宿舎爆破、死傷149人。
日本、メートル法完全実施。
3 米軍、ゲリラを追ってカンボジアに初めて侵入。
8 ソ連共産党、ブレジネフを書記長に。
11 南ベトナムの米軍、24万人に。
5 1 米軍、カンボジア領に砲撃。
5 第10回社会主義インター。54ヵ国参加。
12 米空軍、ベトナム介入以来最大の135波の北爆。
16 中国共産党、五・一六通知発表、文化大革命始まる。
30 横須賀に米原潜スヌークが入港。
6 2 米サーベイヤー1号月面軟着陸成功。
28 アルゼンチンで軍事クーデター。
29 ビートルズ初来日。
北爆エスカレート。
30 ビートルズ武道館で公演。35分間、12曲の演奏。
ド・ゴール仏大統領訪ソ。

ーネガの魅力ー

高山英男（現代子どもセンター事務局長）

小学校の五年生の子どもたちに、「急にすごいお金持ちになったら何がしたい？」と、インターヴューを試みたことがあります。「世界一周がしたい」「カッコいいスポーツカーを買う」「貧乏な人のために社会事業をやる」など口々にいうなかに、一人の男の子がいいましたー「土地を買ってアパートを建てる！」ボクはなんとなく、このガキをぶんなぐってやりたくなりました。

「現代っ子」はがめつい、合理的な考え方をするなど、大人のまゆをひそめさせたり、感心させたりしています。だが、この子どもの合理主義が、大人の社会の現状適応的な矮少な合理主義のストレートな反映であるだけではほんとにおさむい話です。子どもは子どもとして、独自の空想と冒険への夢を断固として主張してほしいとおもいます。前の質問にたいしても、「軍艦を買って海賊になりたい」とか「宇宙探検への夢」とかを奔放にしゃべるヤツが一人や二人いたっていいじゃあないか。

写真に、ネガ（陰）とポジ（陽）があります。人生にも、当然ネガの部分とポジの部分があります。子どもの合理主義が、つねにポジの部分しか見ることしかできないとすれば、この世の中はまったくおもしろくも、おかしくもないにちがいありません。子どもが、人生の心のひだの深みとふれあわないまま、スイスイ通りすぎていくとすれば、文学や芸術は豊かに開花することをやめるでしょう。

白土三平さんの忍者漫画に、ぼくがひかれるのは、歴史や人間のドラマのネガの部分を鋭くえぐりだそうとしているからです。そこにおける未知なるものへのおそれ、人生へのきびしさ、むなしさを、なんとなく訴えかけているからです。そして、白土さんの荒々しい、未完成の絵のタッチが、現代っ子のこじんまりまとまった、ひよわな合理主義を粉砕してくれることをねがうからなのです。

月刊ガロ64年12月号より

7
12 シカゴ・ウエストサイドで黒人暴動再発、全米に波及。
17 ホー・チ・ミン北ベトナム大統領、徹底抗戦アピール。
31 英、植民地省廃止。

8
5 米ジョンソン大統領、インフレにより宇宙開発費削減を発表。
10 米空軍、サイゴン南方で誤爆、死傷者197人。
11 インドネシアとマレーシアが平和協定。
18 北京天安門広場で紅衛兵百万人が文革勝利集会。
25 ベトナム米軍兵力30万人突破。
29 ビートルズがサンフランシスコで最後のコンサート。

9
19 ローマ教皇パウロ6世、第3次世界大戦の危機を警告。
27 国連でナミビアの南ア信託統治終了決議。
28 インドネシア国連復帰を承認。
30 ボツワナ（旧ベチュアナランド）、英より独立。

10
4 レソト（旧バストランド）英より独立。
21 インド、アラブ連合、ユーゴの非同盟3国首脳会議。

11
27 プラウダ、「反レーニン主義」と初めて毛沢東を名指しで非難。

12
1 西独大連立内閣、ブラント外相の東方外交始まる。
15 ウォルト・ディズニー死去。

この年 世界ヘビー級チャンピオン、カシアス・クレイ（後のモハメッド・アリ）ベトナム徴兵拒否でタイトル剥奪。少年マガジンに「巨人の星」連載開始。この年から敬老の日、建国記念日、体育の日新設。キング夫人、ウインブルドンテニスで3種目制覇。

1967（昭和42年）

1
8 米・南ベトナム連合軍、サイゴン北西の「鉄の三角地帯」に大攻勢。
11 革命派労働者による上海コミューン樹立を共産党中央が指示表明、上海一月革命始まる。
27 宇宙空間平和利用条約調印。27ヵ国参加。

2
1 北京で反ソデモ激化。
6 ベトナムで米軍が枯葉剤を使用開始。
14 中南米14ヵ国、非核武装条約調印。
24 米軍、初めてベトナム非武装地帯を砲撃。

3
4 高見山十両に昇進、初の外人関取に。
21 ホー・チ・ミン大統領、ジョンソン大統領の和平交渉申し入れ拒否が判明
31 ジョンソン大統領、米ソ領事条約に署名。

4
1 ソ連、国営農場の独立採算制移行を決定。
4 キング牧師、良心的兵役拒否を呼び掛ける。
15 ニューヨークでベトナム反戦集会。40万人参加。
16 東京都知事選で社共推薦の美濃部亮吉が初当選。
21 ギリシアで無血クーデター。

5
2 バートランド・ラッセル主唱の「ベトナム戦争犯罪国際平和法廷」、ストックホルムで開催。米に有罪、豪、ニュージーランド、韓国が共犯に。
11 香港で労働者と警官隊が衝突、反英闘争激化へ。
13 ニューヨークでベトナム派兵支持の7万人パレード。
19 南西アフリカ（ナミビア）の国連統治を決議。
30 ナイジェリア東部地域がビアフラ共和国として独立。

6
5 イスラエル、アラブ連合などへ攻撃開始、第3次中東戦争勃発。
6 アラブ諸国、米英と断交。スエズ運河閉鎖。
10 ソ連、イスラエルと断交。東欧も追随。シリアが戦闘中止、第3次中東戦争終結。
17 中国、初の水爆実験成功。

7
1 EC、ECSC、ユートラムを統合、欧州共同体EC発足。
23 デトロイトで史上再大規模の黒人暴動。ジョンソン大統領、鎮圧に軍隊派兵。5日に渡り、死者38人、負傷者千人以上。
プエルトリコ住民投票、米51番目の州への帰属は拒否される。

水木しげるのまんが

評論家　野村重男

水木しげるのマンガの生命は、語りくちのたくみさにある。この語りくちのうまさは、人情話や古典落語のなかに流れている、語りくちのうまさである。いまの若いマンガ家たちには、すっかり忘れられてしまった語りくちを、水木しげるは持ち続けている。

水木しげるのマンガは、いわゆる当世風ではない。画は動きがすくなく、モダンでもなく、テレビ向きでもない。水木マンガの形式は、古い時代のものだといえる。ところが、この古い時代の形式と語りくちのうまさとが一致すると、不思議な世界が出現する。かびくさい破れタタミのにおい、露路裏のビンボーのにおい、夕暮れどき蚊柱のかげからフウッと顔をだすお化けの影、紙芝居屋の拍子木の音、そうした雰囲気が、たちまちわたしたちを取り巻いてしまう。人形芝居を観にいったら、いつのまにか舞台で妖怪人形たちに取り巻かれてしまったという、コワサ、面白さが水木しげるのマンガにある。そして、作者水木しげるも、妖怪人形の一人として、画の中に登場しているようである。経済成長・所得倍増と、モヤシみたいに伸びた日本の「繁栄」と「豊富」を、人形たちは笑っている。風刺のユーモアを通して、水木しげるの思想は、マンガのなかを動きまわり、時代を嘲笑する。

新しがりやの、モノマネ好きな若いマンガ家がわれさきにと、世の中の先端に立とうとしている時、水木しげるは、みんなの一番ビリッケツを歩きながら、時代の、もうひとつ向う側をみているようである。いまどき、貴重なマンガ家である。

ガロ11月号
「勲章」より

月刊ガロ65年1月号より

8　1　ワシントンで黒人暴動。
　8　東南アジア諸国連合（ASEAN）結成。
　16　北朝鮮が正式国名を使えないと、ユニバーシアード東京大会不参加を表明。ソ連・東欧も追随。
　17　東京・山谷で暴動・放火相次ぐ。
　21　中国、領空内で米軍機2機を撃墜と発表。
　22　紅衛兵が北京・英大使館に放火。
9　3　南ベトナム大統領選挙、グエン・バン・チュー、グエン・カオ・キが正副大統領に。不正選挙との批判続出するが米が承認、日本も追随。
　20　香港反英暴動で死者13人。
10　8　ゲバラ、ゲリラ闘争中にボリビア陸軍にアンデス山中で射殺さる。
　5　反日共系全学連2500人、佐藤首相の東南アジア歴訪を阻止しようと羽田空港で警官隊と衝突、学生1人死亡。
　10　発展途上国77ヵ国会議、アルジェ憲章採択。
　16　米でベトナム反戦週間始まる。全米30都市でデモ・集会。
　18　ミニスカートブームの火付け役、ツイギーが英から来日。
　24　米ソ間にホットライン開通。
11　2　那覇市で沖縄即時無条件返還要求県民大会開催。10万人参加。
　12　佐藤首相訪米、第2次羽田闘争。学生ら300人検挙。
　29　米マクナマラ国防長官、北爆に疑問を理由に辞任。
12　1　米ベトナム兵力47万8000人に。
　3　南アフリカで世界初の心臓移植手術に成功。
　11　超音速旅客機コンコルド1号機完成。
　14　米スタンフォード大学でDNAの合成に成功。
この年　川端康成、安部公房、三島由紀夫が文革に抗議声明。ナイジェリア内戦。ブロードウェーで反戦ミュージカル「ヘアー」大ヒット。テレビ普及率83%。銀座線など、都電8系統廃止。

1968（昭和43年）
1　5　チェコスロバキア、ドプチェクが第1書記に就任。「プラハの春」。
　9　アラブ石油輸出国機構（OAPEC）結成。
　17　米空母エンタープライズ佐世保入港。
　19　エンタープライズ佐世保入港反対運動激化、三日間で250人が重軽傷、反対運動は23日まで続く。
　29　東大医学生が医師法改正に反対、無期限スト突入。東大紛争始まる。
2　4　米ベトナム派遣兵力、遂に50万人突破。
　7　カナダで憲法改正、英・仏語が公用語に。
　オーストリアで死刑廃止。
3　8　ドル不安でロンドン、パリで金買いブーム。
　16　南ベトナム・ソンミ村で米軍による大虐殺事件。
　31　ジョンソン大統領、北爆の一方的中止、和平交渉を呼び掛ける。
4　4　キング牧師、メンフィスで暗殺さる。各地で黒人暴動。
　5　チェコ共産党が新綱領、言論・宗教の自由を認める。
　10　毛沢東、「文革の本質は階級闘争の継続」と語る。
　11　政府、続発する全学連のデモに騒乱罪適用を検討。
　12　霞ヶ関ビル完成。
　14　東京国税局、日大の20億円使途不明金摘発。日大紛争へ。
　25　ソ連、チェコ・ポーランドの自由化促進者を非難。
　29　黒人の「貧者の行進」が全米からワシントンへ向けて出発。
5　3　米、北越がパリ和平会談開催に合意。
　パリ大学分校でド・ゴール政権打倒デモ、警官隊と衝突。大学閉鎖、4日にはソルボンヌ大へ波及、全仏へ。「5月危機」。
6　16　原子力研究所がプルトニウム239を初国産化。
　12　国連、核拡散防止条約推奨、南ア人種差別非難決議可決。
　20　ワルシャワ条約機構軍がチェコ領内で軍事演習。
7　1　核拡散防止条約ワシントン・ロンドン・モスクワで調印。
　17　イラクで無血クーデター。

庶民という匿名の存在
——親愛なるミスター・カルダンへ——

石子順造

カルダンさん、ぼくはあなたが登場しない水木しげるさんのマンガは、魅力が半減してしまうと感じているほどの、あなたのファンです。あなたはその顔からも拝察できるように、かなり鼻の下——いやあなたの場合は鼻の穴の下というべきでした——がお長いようで、このファンレターの主が、若い女性でなくてがっかりしておられることでしょう。

墓場の鬼太郎君が、幽霊族の唯一人の生き残りだとすれば、あなたは妖怪さんの一人のようですね。今野圓輔という怪談研究家によると、死んだ人間の霊魂のあらわれが幽霊で、妖怪は人外（にんがい）のものだそうです。そして妖怪は住んでいる場所もほぼ一定しているのだといいます。ぼくはあなたが何の妖怪で、居住地はどこかとよく考えます。

カルダンさん、あなたは、「こどもの国」ではあのまばらで鋭い髭をすっかり剃っておられましたが、時には「ねずみ男」（「墓場の鬼太郎」シリーズ）のように剃らないままで、あるいは神主（「神様」）や宇宙英雄（「勲章」）、カミサマ（「はかない夢」）にもセールスマン（「幸福の甘い香り」）などにも変幻します。「河童の三平」シリーズの死神も、まずあなたの一変身とみてさしつかえないでしょう。あなたは悪臭を放つボロ衣をまとい、全身にブツブツがあって、あまり皆から好かれないようですが、長身にして痩軀（そうく）、足先を一八〇度開いて立った姿などは、なかなかどうして毅然たるものがあり、ヴェトナムの高僧のようですらあります。

山の中にいる天狗、鬼、山姥や、海にいる人魚とか海坊主のように、妖怪は居場所がきまっているとすれば、あなたはこの日本に住みついている、庶民という匿名の存在の妖怪にちがいありません。

あなたはけっしてドラマの主役を演じたりはしませんが、そして時には当の庶民の子供たちをだましたり、操ったりもしますが、それは実は庶民自身の不条理な欲望や意識の、屈曲した鏡としてなのでありましょう。

ぼくはあなたが、多分今度の戦争に召集されて、あちこちで人間の死をたくさん見てこられたものと推察しております。ですからあなたは、どんな美しく甘い理念も信用せず、貧しい生活的地平の合理に足をつけて、この現実と幻想が入りまじった今日の日本に出没されるのだと思うのです。いや、もしかすると、氏はあの戦争で戦死し、またその後のいろいろな変革運動の挫折の中でも戦死しながら、なおその死体（しかばね）の生ま生ましさによって呼吸しつづけているのかも知れません。

こういうとどこか幽霊族的ですが、庶民という匿名の存在は、つまりは人間であって個人ではないエネルギーなのですから、やはり妖怪族的なはずなのです。そして歴史の現象面には、いつも一歩も二歩も遅れながら、まさにその故に歴史を批判し、本来の筋道に方向づけていく最終的な原動力なのです。ぼくは日本的庶民の触手を逆倒的に映し出す曲率に富んだカルダン氏という凹凸鏡を愛しております。

ぼくはあなたの生みの親である何億人もの庶民の一人として、あなたの産婆役をしてくれた水木さんが、あの細密描写の中にたきこめる情念を、一層あたためてくれるようお願いしたいのです。

ドラマトルギーにおいては、白土三平氏に一目おくとしても、人物形象についてなら、カルダン氏に代表されるように、水木さんは決してヒケをとらないと思っております。

今後とも御活躍を待っております。

カルダンの何億人もいる父親の一人
としてのぼくの中のぼくより。

（美術評論家）

月刊ガロ66年12月号より

8月
30　北炭夕張炭鉱で構内火災、死者31人。
16　米、初の多弾頭ミサイルポセイドン、大陸間弾道弾ミニットマン3型打ち上げに成功。
20　ソ連軍20万、チェコに侵入。

10月
3　ペルーでクーデター。
5　北アイルランドでカトリックとプロテスタントの衝突。
13　劉少奇、失脚。
23　明治百年記念式典が武道館で開催。

11月
1　ジョンソン大統領、北爆停止命令。
6　米大統領選挙、共和党のニクソンが当選。

12月
10　府中市で現金3億円強奪事件起こる。
19　米、ネバダ州で地下核実験。

この年　仏シャンソン歌手シャルル・アズナブール来日。サイゴン駐在日本商社全員引き揚げ。郵便番号制実施。電電公社、都内でポケットベル営業開始。ナイジェリア内戦激化、ビアフラ難民問題。川端康成にノーベル文学賞。国民総生産、自由世界で第3位に。

1969（昭和44年）

1月
10　スウェーデン、西側で初めて北ベトナム承認。
18　加藤東大総長代行の要請で機動隊8500人、東大に突入。安田講堂を攻撃。
25　第1回ベトナム和平拡大パリ会談。

2月
4　PLO議長にアラファトを選出。

3月
2　中ソ国境のウスリー川で両国軍事衝突。

4月
7　東京、京都、函館、名古屋連続ピストル殺人犯逮捕。
14　中国共産党、林彪を毛沢東後継者に指名。
28　仏ド・ゴール大統領経済政策不振で辞任。

6月
8　ニクソン米大統領、8月末までに米兵2万5千人を撤退させると発表。
15　仏大統領選、ド・ゴール派のポンピドーが当選。

7月
14　エルサルバドルとホンジュラス、戦争状態へ突入。
20　米アポロ11号、月面着陸、人類初めて月面に立つ。
31　ローマ教皇パウロ6世、史上初のアフリカ訪問。

8月
2　ニクソン大統領、ルーマニア訪問。現職初の共産圏訪問。
15　史上最大のロックの祭典、ウッドストックフェスティバル開幕。40万人が集まる。

9月
1　リビアでカダフィ大佐らによるクーデター。

10月
21　京大が機動隊導入。学生ら56人逮捕。
1　英仏共同開発のコンコルド、水平飛行で初の音速突破。
10　巨人の金田正一投手、通算400勝達成。
14　九大でも機動隊導入。
15　全米でベトナム反戦メモリアムデーのデモ。
23　ベトナムからの米軍撤退進み、2年半ぶりに兵力が50万人を割る。

11月
3　ニューヨーク市長選で反戦派のリンゼーが民主・共和両党候補を破って当選。

12月
24　米ソ両国が核拡散防止条約批准。
10　国連、生物化学兵器違法宣言決議案を可決。

この年　日本BHC工業会がBHCとDDTの製造中止を決定。1月、南ベトナム派遣米軍兵力54万9500と最大に。『夕刊フジ』創刊。連発式パチンコ15年ぶりに復活。7月、横綱柏戸引退。柏鵬時代終焉。TBSで水戸黄門シリーズ始まる。松竹「男はつらいよ」シリーズ第1作公開。ソニーと松下電器が家庭用ビデオテープレコーダーの開発を発表。服部セイコーが初のクオーツ式腕時計を発表。

※ガロ創刊と激動の60年代※
主な記載事項…講談社「20世紀全記録」より抜粋させて頂きました。

漫画論評

〈絵〉としてのマンガ

それは単に"好み"の問題か

渡辺一衛

画に主張や感情を表現

このごろ美術展やデザイン展に行くと、マンガをとりいれた絵やデザインがときどきあってたのしい。逆にマンガの方にも抽象絵画やデザインの手法はとりいれられているが、この傾向はもっともっとおし進められてよいものだと思う。

マンガはマン画である。つまり画である。マンガは画（絵）にのせてその主張や感情を表現する。しかしふつうマンガの持つ思想や哲学について語られるほどには、絵としてのマンガについては語られないように思う。『ガロ』に書かせてもらう機会に、大いにマンガの絵としての性格に注意を換起したいなどと考えたのだが、ちょっと考えてみると、絵について語るということはそれほど簡単なことではないということがわかる。

たとえば最近の『ガロ』では、私は佐々木マキのストーリーのないようなマンガ（果してマンガといえるかどうか？）が好きなのだが、なぜ好きかといわれると、どうもうまく説明できそうもないように思う。互に無関係に配列されているようにみえる、トランプのカードみたいな絵を眺めていって、「あ、これは前に出てきたやつだな、どこがちがっているんだろう」などと前の頁をめくり直してみる。分ったような分らないような気持で、次々と現れるイメージを追いかけてゆき、それでも何となくおもしろいなあと思って見ているというわけなのだ。

しかしこれを佐々木マキ自身に解説してもらったら、非常によくわかるとか、よりおもしろくなるという風にもならないように思う。たとえば『朝日ジャーナル』の表紙の絵は、終りの方に作者の言葉がついているが、いい絵だなあと思って、作者の書いていることを読んでも、絵そのものを見る眼が変るわけではないし、がいして作者の言っていることは絵自身よりつまらないものだ。マンガだって同じだろうと思うのである。

語りにくいマン〈画〉

絵について語りにくいのは、根本的には次のような理由によるのだと私は思う。分析哲学流の記号論的芸術論によると、芸術というのはシンボルによる表現として考えられるという。しかしこの芸術的シンボルというのは、ふつうの「記号」の役割もするが、同時にそれ自身直接的にみる人の情緒に訴えかけるものをも持っている。それはうけ手の心の状態や何かに深く関係しているのだが、ふつうは"好み"としかいいようのない場合が多いものである。

これは最近知ったことだが、子供に絵をかかせて、子供の精神状態や病気などを診断する方法があるそうだ。たとえば病気の子供はむらさきの色を好んで使うという。

この場合、むらさきの色は、何かのシンボルであるというよりは、もっと直接的なものとしてあるというべきだろう。芸術的素材としての色や音には、いつもそういう性格がある。だから私達が「荒城の月」のメロディを聞くと、いつも土井晩翠の歌詞と結びつけてイメージされる習慣ができているが、外国人はこの曲を聞いて、そういうものなしにやはり何かを感ずるだろう。それが直接的なものである。そしてこれはうけ手によって少しずつちがうものだ。

マンガも、色こそ使わないが絵である以上、同じような事情があると思う。たとえば林静一のマンガの中に出てくる星條旗や日の丸の旗、これはふつうの意味のシンボルだから非常に解釈しやすい。しかし絵であるマンガの中には、こういう風にとらえられない面もたくさんあるように思う。こういう問題について、誰か明快にときほぐしてくれないものかなあと思うのである。そうすれば

マンガ（マンガだけに限らないが）を論ずる際の評価や好みのちがいについて、理由がはっきりして、論争がかみ合うようになり、また交通整理がし易くなると思うのだ。

子供マンガについても事情は同じだろう。石川球太のマンガにときどき大きなコマで出てくる動物の絵はすばらしいと思う。ところが水木しげるのマンガに、これと似たような巨大なマンモスが突然現れたりすると、「やあ、水木しげるにもこんな絵が書けるのか」などと失礼なことをいってよろこんだりするのだが、この場合、このマンモスはとても見事に画かれていなければいけないのである。ところがそういうことは普通のマンガ評論ではほとんど問題にされないのだ。

奇抜なマンガの登場を

私は子供のころ田河水泡のマンガが好きで、田河水泡に弟子入りしたいなどと言い、家人に「お前なんかにつとまるはずがない」と笑われたりしたものだが、それから間もなく長谷川町子が水泡によく似たスタイルのマンガで子供雑誌に登場した。ああこの人は田河水泡のお弟子なんだなとすぐ思ったものである。その後彼女は大人向きのマンガを書くようになり、絵のスタイルも大人向きに変ってしまった。

誰でもがいして子供時代には、きちんと書かれたかわいらしい絵を好むが、大人になるにつれて、もっとくずれた絵のマンガをおもしろいと思うようになる。私はずいぶん成長のおそい方なので、今でも「サザエさん」より子供のマンガの方が好きだ。それでも最近はやはり手塚治虫や石森章太郎の絵には物足りなさを感じるようになってきた。しかしそうはいってもあまりくずれた絵も好きではない。やはり一本一本の曲線が、あるべくしてそこにあると思わせるような、ていねいに書かれたマンガの方がいい。だから大正時代以来の、墨絵風の日本の政治マンガは、絵として好きになれない。これは単に好みの問題にすぎないのだろうか。

最近の子供マンガの中では永井豪、下元克己といった新人のものが、やはりおもしろいと思う。たとえば、「少年マガジン」に連載された下元克己の「快男児ゴリ一平」など、あまりきれいな絵とはいえないが、一コマ一コマの人物の表情までていねいに書き分けられていて（決してそれだけの理由ではないが）とにかく愛読した。背景の、偶然出てくる本箱の本に、虫めがねで見ないと分らないくらいの小さな字で、マルクス、レーニン、毛沢東などと書かれてある。子供のマンガの中で、こんな〝あそび〟ができるのもたのしい。

もっともこのマンガは一回分がとても長い連載なので、三回目あたりから絵もストーリーも平板になっていったような気がする。体力の限界というべきだろう。マンガを書くのは、ずいぶん手間のかかるものらしい。だからマスコミ・ペースではなかなか工夫をこらすよゆうがえられないだろう。その意味で、絵としても、またその他の点でも、新しいスタイルをつくりだす実験を、落着いてできる『ガロ』みたいな雑誌の存在は重要だと思う。

マンガという概念のワクを外れるような奇抜なマンガがどんどんつくられていってよいと思うのである。

（東京医科歯科大学助教授・思想の科学会員）

月刊ガロ69年1月号より

目安箱（めやすばこ） ①

目安とは、昔 百姓が悪政を 領主なり幕府に 箇条がきにして、うったえた訴状のこと

脱脂粉乳 第一回

黒川 新

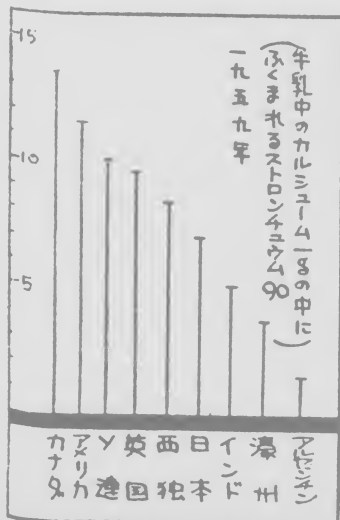
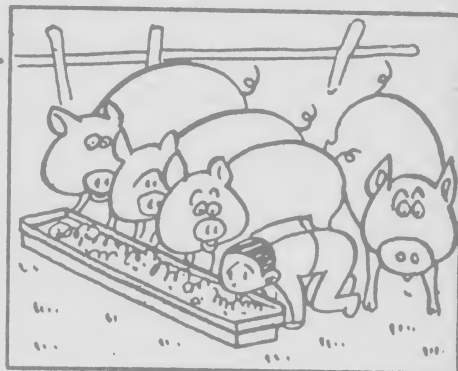
別名「ガスミルク」「ノムトピー」について

① くさい。まずい。

② 栄養がない。

③ 雑菌だらけ。

④ 放射能がいっぱい。

外国では、脱脂粉乳は 家畜の餌と肥料の原料である。だから、まずくて、くさいのは あたりまえ。
世界の文明国でこれを人間の食用としているのは 日本と イタリヤ だけである。　一合の牛乳の中から、6グラムの バターをぬいたカス、つまり、タンパク質を形成している 最も、大切な、リヂニンと ヒッスアミノサン がなくなっている わけで あるから、栄養が あるなどとは 大ウソ。
それが しょうこに、日本にいる アメリカの児童は、日本の生（ナマ）牛乳をのんでいる。　ブタや ニワトリが、たべて 太って いるか といって 栄養があるなんて、いう奴は まず自分から すすんでブタ小屋へ かよう ことである。
だいたい 家畜の 餌と いうものは、きたない 入物に入れてあるものである。
したがって 脱脂粉乳の ほうそうは、ざつであり、非衛生的 であることは、とうぜん。
まず、ほうそうは、紙ブクロ、これは はんめいした ケースだけであるが、中から、長グツ、石、クギ スパナ、ゴルフの玉、コナダニ、が出てきている。　東京では 昨年 一ヶ年間で、110件 いじょう の 異物が発見されている。
こんな じょうたいで、バイ菌が、入っていないほうが 奇蹟である。　島根県では ブドウ状球菌が 検出されている。　そのために 集団中毒が、発生している。
学校へ 行きだす ようになって ゲリをするように なったりしたのは、ほとんど この脱脂粉乳のためといって よいだろう。

左図にしめしたとおり、日本がアメリカのララ物資として輸入している 脱脂粉乳は、一番放射能の多い、カナダ産のものである。　アメリカでは、自国の消費用には、一番、害の少ない、アルゼンチン から、輸入している からおもしろい。　放射能の 害は目にみえて、すぐに現われないが、とうぜん 将来、生殖機能 とうに大きな障害となって あらわれるだろうと、学者間では心配している。
では、次回は、このようなものを なぜ 子供がのまなければならないのか、かんがえて 見よう。

ツヅク

月刊ガロ1965年3月号より

目安箱 ②

給食脱脂粉乳 第二回

黒川 新

マス養魚場の幼魚の餌に輸入脱脂粉乳をあたえたら何万匹もの幼魚は全滅した。

前回においては給食用脱脂粉乳のまずさと、栄養の少なさ、**バイキン**だらけ、ふくまれている**ストロンチュウム**（90）の害についてのべたが、この別名「**ノムトピー**」を日本の将来をしょってたつべき子供たちがなぜのまなければならないのだろいか？

しかも文部省という国の機関、つまり権力によって先生をつかって強制的にのませているのである。

これによってもうけているのは一部業者である。

資本主義だからもうけるのもけっこう。

だが、それが権力によって、しかも学校という教育の場を舞台に親のいうことより先生のことばを信らいしうる子供というぜったいにあんぜんな消費者を強制的につくって子供をぎせいにしながらもうけることはぜったいにゆるせない。

三重県の一学者の実験では17匹のうち脱脂粉乳をのませたものは16匹が流産した。

脱脂粉乳の有害性については有名新聞、雑誌においてさえ度々発表されていたことである。

小中学校の校長および先生がこれらをしらないはずがない。

しっていてこの死の商人と共に行動をともにするのは教育者という、**かめん**、をかぶった鬼である。

もちろん先生が「**ノムトピー**」について本当のことをいったり、飲まないように子供たちにいえば勤務評定という権力機構の圧力によって首があぶなくなるようになっているのである。だから先生たちは子供たちに有害とわかっていてのませているのだ。

かって、まちがった戦争に青少年　おいやって、とうとい命を失しなわせたあやまちをまたくりかえそうとしているのだ。

だがこの中でこれら圧力にまけず「**ノムトピー**」に反対し行動している先生や母親たちもいるのだ。だが、学校当局や政府はこれらの人々を「**アカ**」だとかいってごまかしているのである。こんなことをいていてよく教育者なぞといばっていられるのは全くおかしい。はずかしくないのだろうか？

やれ道徳教育の、健康で明るく、自分で考え行動する子を、心のきれいな人間を、日本は自由の国です、なぞとおしえているのは**大ウソツキ**の大詐欺師の殺し屋である。

しかも安い月給でやってるのだから大馬鹿の**ウスノロ**である。

まずいものはまずい体にわるいものはいやだとはっきりいえる子供を育てることこそが真の教育である。

次号へつづく

月刊ガロ1965年4月号より

問題　　　西光被斬

▲「自由圏諸国の安全を守るため」「隣りの国と仲良すするため」——こんな子供だましのような言葉で侵略的な意図や、暴力が正当化される——もうここまで状況は腐りきっている。だが我々は愛想をつかすだけで良いのか。

▶「ヴェトナムでの戦争、日韓条約の批准についてどう思いますか？」
「戦争は二度とごめんだが、俺にゃ難しくてわからねえんですよ。でも早え話が俺はもうこんな歳だから戦争に行くこともあんめえが、今の若え人達は気の毒だよ」（六十歳・男）
「もう何がなんだか、ごちゃごちゃになってわかんなくなっちゃってんのよ」（高校生）
「日韓条約の暴力的通過は私には花火のように見えました。花火の閃光のなかで、私達のこれから行く戦場のありさまはよく見えました。そのとたん、私の心はぱっくり割れて、まっかな口を開きました。あのヴェトナム解放軍兵士の傷口のように赤い口をあけて何かが笑っていました」（大学生・男）

▶状況は腐りきった。はやい話が上述した老人と同じ年頃なのである。今の政治家達は。それにしても高校生のあの言葉——ふざけてもらっちゃこまる。わからないという言葉は、わかろうとしてとことん努力した人間の吐く最後の言葉だ。
▶「反対運動をしている人のなかには、よく解りもしないで参加している人達がいる」ある飜訳文学家はいう。だがそういう御自身はどうなのか、いったい解ろうとしていると断言出来るだろうか？　どのような観点からみても、アメリカのやってる事は、佐藤内閣のやってることは、決して良いこととはいえない。
▶とにかく感覚的にでも悪いと思ったならば、まず行動してみることだ。そこからすこしずつすこしずつ解ろうというものじゃないか。混沌を恐れてはならない。恐るべきはその臆病である。
▶反戦運動をやっているアメリカの学生達は「まず身近なところから」というので黒人街に休暇中泊り込み　公民権の手続きを助けたり、黒人子女の教育にあたったと聞く。日本のある大学生達も、東京多摩地区の農家に出かけ、田植えや稲刈りの手伝いをしながら、どうしてこう生活が苦しいのか話し合ったと聞く——何もこのことだけで世界が百八十度変るわけではない。だが学ぶべきはこの精神ではないか？　まず前へ一歩踏みだそう！
　具体的には、戦争を無くし、我々がより幸福に毎日を充実して送るために、自分のやりたいことがスムーズに実行出来るような世の中にするために、戦争に導くような条約に反対したりデモを行なったりする事は勿論、署名運動や集会に積極的に参加したり、仲間をつくって、解らないことを勉強し合ったり話し合ったりすることである。そこから始まる。

目安箱⑫　日韓条約―反対運動以前の

▲一部の不心得を除き、大方が平和を望んでいることは疑わない。だが戦争はどんな戦争でも嫌だといいながら、その戦争をなくするための闘いに加わらない人は実に多い。平和主義ということは闘わないということではない。一見甘そうなこの言葉も、その平和を守るためにはどんな闘いをも辞さないという不断の決意と覚悟の上にしか成り立つものではない。あえてヴェトナムの例をとるまでもなく、その闘いは日夜休むことなく行なわれている。ただ私達が最も気をつけていなければならないことは、少なくとも日本ではそういった力と力とが真正面から衝突しているという形ではなく、不断の矛盾と巧みなごまかしの中で真綿で首方式でやられているということだ。そんな現実から眼をそらし、全く個人的な逸楽の中に逃避してゆくのであれば、平和主義ということは、言葉はきれいでも、やってることは戦争協力だ。さらにそういった個人が全く個人主義倫理の中に埋没してしまっているという現実もまた、何かのために巧みにつくりあげられているんだということを忘れてはならない。全く今の世の中は個人個人がばらばらになるように置かれている。

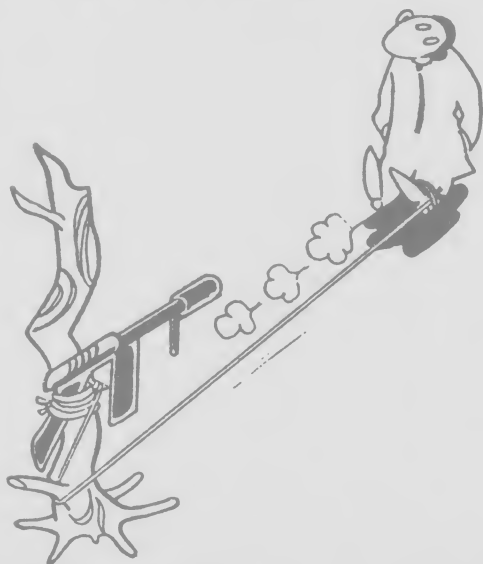
ぬくもった蒲団の中から抜け出るのが嫌なだけではみの虫と何ら変るところはない。しかもみの虫は成長してやがて蛾となるが、そうした我々の未来には何も無いではないか。

▲黄色い血の問題がむしかえされてきた。「ライシャワーさんも血清肝炎におなりになったとか、困ったものねえ」という訳でもあるまいが、愛の献血運動が大分前に始められた。癪にさわることは、そうした黄色い血の問題が、協力呼びかけのチラシでも、ラジオのルポでも、その原因を、血を売らなければ生きてゆけない人達の上にもっていっていることである。彼等の生活の困窮ぶりを表面に強く押しだすことで、真の原因を人々の前からまったくおおい隠していることである。

▲赤い羽根の募金が虫に喰われていた。当局の責任者はのたもうた。「全く知らなかった。速刻調査して、然るべく善処します。」困っている人達のために、赤い羽根を買ったり、献血したりしている人達――もとよりそういう人達が悪いといっている訳では決してない。みんな良い人達ばかりである。だが、何故にみんなの善意が、ストレートに社会に反映してゆかないのか。どこでどう歪められるのか。

国内で集めた文字通り国民の血が、負傷したアメリカ兵のためにヴェトナムへ持ってゆかれ、国内では依然として黄色い血を使っているという話さえ聞く。赤い羽根をつけて得得としている人、献血をしてこの上もなく善行をしたと思っている人――自分をも含めてあえて言う。責任がないとは言わない。だが誤解を避けておきたい。最も憎むべきはそういう状況であり、それをつくりだしている政治である。社会を構成している一人一人の主体性の欠除もさることながら。

▲日韓条約は衆議院を通過した。通過したのではなく、暴力で押し通された。大方はいう。「もう愛想が尽き果てた…」

月刊ガロ1966年2月号より

目安箱⑬

共有と私有

——小繋の入会権訴訟について——

上野昂志

「はじめに山があったのだ。法律は後から出てきたのだ。後から出てきてああだこうだと理屈をつけた。頭のいい、ずるい奴がその法律を使って、山をわがものにしようとしたが、まえから山を使っていた人間の権利はなくなるものではない。」

これは、小繋の山の入会権をめぐる争いが始まった時から、30年間、終始農民と共に斗い、死んでいった小堀喜代七の言葉であるが、法律の場において抽象的な結果の出された現在もなお、溌剌とした生命をもち続けている言葉ではあるまいか。

昭和41年1月28日、最高裁第二小法廷は、「小繋部落の住民は、かって小繋山への入会権を持っていたが、仙台高裁の調停により、その権利を失った。」という判断を示した。

最高裁判決の根拠になっている「仙台高裁の調停」とはどういうものだったか。

それは、裁判所と、この紛争を起した鹿志村亀吉と、戦後・小繋の人たちに代って裁判の表面に立った山本善次郎との間だけで、秘かに昭和二十八年十月十一日にまとまったものである。小繋の人々が調停成立を知ったのは、十一月に入ってからであった。

▲農民たちにとって、この調停はまさに寝耳に水であった。だが、かって農民の一人として鹿志村と対立していた山本善次郎が、どうして調停にもちこんだのだろうか。

小堀喜代七亡きあと、山本は、訴訟の代表人になると同時に、裁判費用捻出のためにかけまわる。その時、彼は、勝訴になったら山の半分をやるという条件で借金をする。だが、彼が使った金は、裁判費用だけではない。昭和二十八年頃に、当時の金で八百万から一千万円ぐらいの借金になっていた。そして、どうにも動きがとれなくなって調停に持ち込んだのであった。

このような、真の意味での当事者不在の調停は、たとえ書類の上で首尾一貫性を保っていたところで、それは少しも現実的、論理的ではない。とはいえ、今度の最高裁判決だけでなく、この事件に対する法律決定は常に、非現実的・非論理的だったのだ。そのことを歴史は、はっきりと示している。

▲小繋の山は、先祖代々、部落民が自由に出入りし、山の木で炭を焼いたり、薪をとったり、草を刈ったりしていた。このように、山を部落中で使うのを入会権という。明治の地租改正の後でも、山の入会はかかわらず行われていた。ただ、その時、地券を下附してもらわねばならないので、部落民一人一人がそれをもらうのも面倒で、地券の名儀を部落民代表立花喜藤太にして届けた。

▲後に、立花喜藤太は、山の名儀を担保に使って借金をするようになり、名儀人は転々と変わる。だが、それは名儀だけであって所有権でないことは自他共に知っていた。

立花喜藤太 ←借金 / 山の名儀→ 金子太右衛門 ←山の名儀 / 借金→ 鹿志村亀吉

▲大正四年旧暦六月八日午前十時頃、小石川石太郎宅の蚕室から出火、小繋部落を焼きつくす。この時山関係の書類一切は焼失。それを待っていたかのように、鹿志村亀吉は宣言する。

「この山は明治三十四年に俺が買った山で、部落の山ではない。一木一草といえども山の木を勝手に伐ってはならない。」そして警察は、山に出入りする部落民を呼びだして、森林盗伐罪で逮捕するとおどした。

▲部落民は、鹿志村に対抗するために、訴訟を起こす。そして訴訟に明るい小堀喜代七に指導を頼む。喜代七は部落民に語る。「相手の鹿志村は銭をもっている。銭の力で警察をも味方につける。銭も警察の味方もない部落はなんとするか。人がかたまることだ。」

▲そしてこの時から、小繋部落の人々の五十年にわたる斗いが始まる。昭和二十年までの三十年間は小堀喜代七を中心として、それから九年間は山本善次郎を代表にして、その後現在に至るまでは、様々な階層の人々と共に、分裂、生活苦、裁判費用捻出の苦労、逮捕、拷問に耐えながら、生活権を守る斗争は続けられたのだ。以上のような事実をちらっとでも眺めれば、今度の、いやこれまでの裁判の持つ非論理性は自然とはっきりするであろう。

ところで、一月二十八日の朝日新聞は〃入会権〃にふれて次の様な解説をしている。

「これ（入会権）は近代的な所有権と相いれない面をもつ以上、整理されるのは当然の成行きともいわれ、現に大正から昭和初期にかけて争われた多くの入会権訴訟はほとんどが住民側の敗北で終止符を打った。」

この記事は、小繋裁判の核心に無意識的にふれているといえるだろう。法律のレベルでは、事実と虚偽の争いだが、内容としては、前近代的共有と近代的私有との争いである。山は誰か一人の持ちものではない。それはそこに生活するもの全ての財産であるという、かっての原則を、近代は否定した。土地会社はビラをまき、「いつか庭つきの家を持ちたい」ということが都会の小市民の生涯の夢になる。このような時代にあっては、「皆のもの」という観念は、幼児むきの教訓としてしかあつかわれなくなる。だから、各新聞が、小繋に、「政治、経済の救いの手が必要」とかくのも、この時代にぴったりマッチした、結構な福祉国家向きの標語としての値打ちはある。では、小繋部落の人々は近代に負けねばならないのだろうか。

いや、そうではない。入会権は、確かに前近代的な側面も持っているが、それと同じくらい超近代的――近代を超えた次の時代――な性質をも持っているのだ。それは近代的私有の観念を打破した共同所有の原則をもっている。従って小繋の人々の斗争は、近代的法律の場においては当然敗北するのである。何故なら、法律がもし小繋の人々の土地共有を認めたら、それは自己の拠ってたっている時代の存在そのものを否定することにつながっていくからである。とはいえ、その敗北はあくまで墨で書かれた判決文においてだけであって、トータルな現実における敗北では決してない。現実において、共有権を主張し、その権利を貫くことは、この時代に穴をあけ、次の時代へ突きぬけることなのである。

小繋の人々の「生きるため」の斗争は、今や、法律の枠を超えて、時代そのものと対決することになったのだ。

月刊ガロ1966年4月号より